

教員と作業療法士の連携のあり方を探る

～あさひ学級(情緒障害通級指導学級)の教員に対するインタビュー調査を中心に～

**Cooperation between the teacher and the occupational therapist:
by interviews with teachers of resource rooms for emotional disturbances in elementary school**

稲垣 まりえ (Marie Inagaki) 指導：川名 はつ子

【目的】 現在筆者は、就学前の発達障害（「発達障害者支援法」の定義に基づく）をもつ児童の療育に作業療法士（以下OT）として携わっている。2008年から学生ボランティアとして都内の情緒障害通級指導学級（以下情緒学級）あさひ学級（仮名）に関わっており、学校にOTとして現場の教員と共に発達障害児の支援を行いたいと考えている。そのため本研究では、発達障害児に関わっている情緒学級の教員の①児童の行動や学習、指導についての考え方 ②他職種や外部機関との連携の在り方についての考えの2点を明らかにし、更にそれらをもとに、今後の教員と作業療法士との連携について示唆を得ることを目的とした。

研究1：あさひ学級の教員に対するインタビュー調査

＜目的＞あさひ学級（週に1回、決められた曜日に児童は通級）に通う児童の行動や学習についての教員の考え方、他職種や外部機関との連携についての考えを明らかにすること。＜方法＞あさひ学級の教員3名を対象に40分～1時間程度の半構造化面接を1回ずつ実施、インタビュー内容を録音した。教員には質問項目（Ⅰ．教員自身 Ⅱ．児童や指導 Ⅲ．連携 Ⅳ．業務）を書いた紙を事前に渡し、面接時にその紙面を見ながら自由に話してもらった。

＜結果と考察＞「Ⅰ．教員自身に関するエピソード」では学級に存在する“先輩の教員”の影響が大きく、A区の場合1970年代に行われていた指導が、「良いものは続ける」という教員の熱意により、少しずつ形を変えながらも現在に引き継がれていることが明らかになった。良いものを続けるのは素晴らしい取り組みではあるが、単純に続けていくだけでは、“時代遅れの指導”になってしまう危険性がある。そのため、対象児や新しい知識を加味しながら、指導を振り返り、より良い指導を行うことが重要である。「Ⅱ．児童や指導に関するエピソード」では同一学級内の教員であっても、教員の興味や関心、価値観や各々の経験によって、児童を見る視点や指導法を考える切り口が異なり、同じ学級内でも他の教員の意見を聞くことで、より広い視野で児童の指導や支援が行えるため、学級内の教員同士で情報交換を行える場が必要であると考えられる。しかし、「Ⅳ．業務に関するエピソード」において、日々の業務に追われ、学級内の教員間で情報交換が十分に行えていないと感じていることが明らかになり、今後、情報交換の場と時間をど

の様に設けるかの検討が必要である。「Ⅲ．連携に関するエピソード」では、情緒学級の教員が通常学級の教員との連携に際して困難を感じており、専門家との連携の機会は限られていることが明らかになった。特に、実際のあさひ学級での児童の様子をみる専門家はOTの筆者以外に現在いないため、今後予算を申請することや、学校や学級で専門家の入り易い雰囲気作りを行うことで、学級に専門家に関われるよう体制を整える必要性のあることが教員から挙げられた。

研究2：情緒学級の教員を対象としたアンケート調査

＜目的＞情緒学級の教員が教育現場で何に困っているのか、OTに何を求めているのか、ニーズを明らかにすること。

＜方法＞対象と手続き：2010年某日、筆者が外部講師として講義を行った研究会に参加していた情緒学級の小・中学校の教員約80～100名（途中参加・退室あり）。2時間半の講義終了後、アンケート（無記名）について説明を行い、A4 1枚の調査票を配布、記入後、回収した。

＜結果と考察＞52名からの回答があり、回収率は52～65%であった。研究会についての質問項目において、8割以上の教員から「満足」以上の回答が得られ、経験年数が浅くとも、OTとしての視点や知識は情緒学級の教員にとって有用であることが分かった。また、自由回答式の項目において「具体的で参考になった」という回答と「もっと具体的な話をしてほしいかった」という回答が、いずれも複数存在した。これは、何が分からないのか、何を知りたいのかなどのニーズが、教員により異なるため生じていると考えられる。加えて、児童の行動背景の理解が困難であり、指導の目的を設定しづらいために、教員自身が、自分のニーズを把握できていない可能性も考えられる。そのため教員とOTの連携において“教員が何を求めているのか”のニーズを教員とOTが、あらかじめ共有することが必要である。